



学習者のI-JAS対話タスクにおけるオノマトペ使用に影響する要因

廉, 沢奇

(Citation)

統計数理研究所共同研究レポート, 469:53-62

(Issue Date)

2024-03-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487706>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487706>



学習者の I-JAS 対話タスクにおけるオノマトペ使用に影響する要因

廉 沢奇(神戸大学大学院生)

Factors Influencing the Use of Onomatopoeia by Learners in I-JAS Dialogue Tasks

LIAN, Zeqi (Graduate School of Kobe University, Graduate Student)

概要

本研究は、日本語会話において頻出する基本 ABAB 型オノマトペ(例:どんどん、そろそろ)104語(廉, 2022)について、オノマトペ使用量に影響する要因の解明を目指したものである。手法については、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)に収録されている学習者の背景情報に基づき、重回帰分析で学習者の属性とオノマトペ使用量(トークンとタイプ)の関係を探り、その原因を解釈した。これより、ABAB 型オノマトペの使用は学習者の聴解・読解能力と関係があることがわかり、学習者にとってオノマトペをうまく使うには日本語の理解力が必要であることが示唆された。

キーワード

オノマトペ、重回帰分析、日本語学習者

1. はじめに

「オノマトペ」はギリシア語の *onomatopoiia* を語源としており、「音による命名」ないし「音それ自身が名になる」の意を持つ。オノマトペは広く世界の諸語に見られるものであるが、日本語はオノマトペの豊富な言語として知られる。たとえば、小野(2007)のオノマトペ辞典には 4000 を超えるオノマトペが収録されている。

日本語のオノマトペは数が多いだけでなく、語義も多く、さらに用法も多彩である。その中に、ABAB 型は特に難しいとされる。例えば、『日本語オノマトペ辞典』によれば、ABAB 型オノマトペである「ごろごろ」の項目には 6 種類の語義が掲載されている(擬音語としての「雷のとどろき響く音」「猫がのどを鳴らす音」「丸いものが転がっている音」と擬態語としての「無造作に転がっているさま」「仕事をしないで、むだに暮らしているさま」「小さいものが間に入って違和感があるさま」)。

このように、数・語義の多さや、用法の多様さを特徴とするオノマトペは、日本語学習者から見れば、とくに習得が困難な言語項目の一つである。より体系的にオノマトペを指導するために、学習者のオノマトペの使用実態について多くの研究がなされてきた。しかし、その大多数はレベル・母語とオノマトペ使用実態の関係までとどまっており、具体的な使用量に影響する要因の考察まで踏み込んだ研究は極めて少ない。この点を明らかにするため、本研究は、コーパスから得られたデータを用いて学習者の使用量にどのような要因が影響しているか、調査することとした。

2. 先行研究

すでに述べたように、先行研究の多くは学習者のレベル・母語要因とオノマトペの使用実態について研究がなされてきた。以下は前田(2009)、グエン(2018)、左雲(2023)3つの先行研究を取り上げ紹介する。

前田(2009)は、学習者のレベル要因および学習者と母語話者のオノマトペ知識の違いを調査するために、ドイツ人日本語学習者と日本語学習経験のないドイツ人、そして日本語母語話者を対象に、ABAB型オノマトペの意味理解に関する実験が行われた。実験では、参加者にオノマトペを音声で聞かせ、それらを含む文を読ませた上で、オノマトペの意味を推測させた。推測の正確さを測定するために、心理学の実験手法である Semantic Differential Method(SD法)が用いられ、参加者に意味が真逆となる形容詞ペアに示し、各オノマトペの意味を5段階で選ばせた。分析の結果、日本語学習者はオノマトペのおおよその意味を理解しているものの、母語話者と比べると正答率が低いことが明らかになった。さらに、学習者の意味推測の正答率と日本語能力や学習経験との間に相関関係は見られず、日本語学習経験の有無による差は認められなかった。

次に、グエン(2018)は、レベル要因をコントロールし、母語の影響を探るために、JLPT N2に合格している中国(20名)とベトナム(19名)の日本語を専攻とする大学生を対象に、オノマトペ知識の差異を調査した。調査では、21種類の短いアニメーションを参加者に見せ、それぞれに適したオノマトペを穴埋め形式で回答させた。例えば、風車が回転するアニメーションでは、「風車が風で()回っている」という文が提示され、参加者は括弧内に適切なオノマトペを記入する(正解は「くるくる」)。調査の結果、中国人参加者の正答率は29%、ベトナム人参加者は55%であった。このことから、同じ日本語レベルであっても、母語の違いによって日本語オノマトペの知識に差が生じることが示唆された。しかし、両グループに共通する特徴も観察された。例えば、前述の風車の問題では、中国人・ベトナム人ともに、風車の回転から連想される「まるまる」や「まわまわ」といった誤答が見られた。このことから、日本語オノマトペがわからない場合、学習者は既知の語彙から連想し、その語基を反復させてABAB型のオノマトペを作り上げる傾向があり、この傾向は母語の違いを超えて共通していることが示唆された。

左雲(2023)は、日本語学習者のオノマトペ使用実態を明らかにするため、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)の対話データを使い、参加者を初級・中級・上級に分け、一人当たりの使用回数を調査した。調査対象語は先行研究のオノマトペリストから選定された「心」に関するオノマトペ45語のオノマトペである。その結果、学習者のレベルが上昇するとともにオノマトペ使用回数も増えることがわかった。また、初級学習者の誤用を観察した結果、コロケーションが覚えていないことや、使わない形が出てくることがよく出現し、オノマトペの使用場面やコロケーションの指導を行う必要性が示された。

上記で見たように、オノマトペの学習者による使用実態に関する先行研究は、データの選定や調査の手法、また、それらを通じて得られた知見に関して、示唆に富むものである。しかしながら、全体としてレベル・母語とオノマトペ使用実態の関係を調査する研究が多く、コーパス規模の大量データを使い、より細かく学習者の使用に影響する要因に注目した研究はまだ少ない。

そこで本研究は、学習者コーパスの対話タスクを調査資料とし、学習者の背景情報(年齢・日本語テストのスコアなど)と使用実態の関係を調査することで、新しい観点から、学習者のオノマトペ使用に影響を与える要因を把握することを目指す。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

すでに述べたように、本論文の目的は、学習者コーパスを分析し、話し言葉で重要な ABAB 型オノマトペ(廉, 2022)について、学習者のオノマトペ使用量(トークン・タイプ)に影響する要因を解明することである。この目的に沿って、以下の 2 つの研究設問を設定した。

RQ1 学習者の属性によってオノマトペ使用量(トークン)はどうか？(トークンに影響する要因)

RQ2 学習者の属性によってオノマトペ使用量(タイプ)はどうか？(タイプに影響する要因)

3.2 データ

本研究で使ったコーパスは『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)である。I-JAS は、学習者 1000 名、日本語母語話者 50 名、合計 1050 名の対面調査で収集した発話と作文、一部の参加者から収集した任意の作文、さらに、日本語能力テスト結果など、全参加者の詳細な背景情報のデータが含まれており、日本語学習者研究の基盤資料とされる大型コーパスである。日本語レベル判定について、I-JAS では、学習者の言語能力を客観的に判断するため、J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test)と SPOT (Simple Performance-Oriented Test)という 2 つの言語テストを受験させ、そのスコアをコーパスに包含している。収録しているデータについては、ストーリーテリング、ロールプレイ、対話など計 12 タスクがあり、テーマやジャンルをできるだけ統制するという観点から、本研究はもっともデータ量が多い「対話」データだけに絞って調査する。

なお、本研究で使う I-JAS の参加者について、日本国内環境の日本語学習者は要因が海外環境より複雑なので、本研究は日本国内環境を調査せず、全 850 名の学習者を対象とする。以下は本研究が使う研究対象の内訳である。

表 1 本研究で使う I-JAS の参加者の詳細

環境	母語	人数
海外 教室 環	インドネシア語、スペイン語、タイ語、トルコ語、ドイツ語、ハンガリー語、フランス語、ベトナム語、ロシア語	各 50
	英語	100

	韓国語	100
	中国語	200
合計		850

上記に見られるように、幅広い母語背景を持つ学習者が今回の調査対象となっている。したがって、今回の調査で得られた結果は、特定の学習者のみに当てはまるものではなく、幅広い世界の日本語学習者に資するものになると期待される。

また、本研究では学習者のオノマトペ使用量に影響する要因を探るため、I-JAS の学習者背景情報(フェイスシート)を参照し、中から 11 種の属性を説明変数として選定した。各変数と重回帰分析を行うためのデータ処理方法は下表の通りである。

表 2 本研究で使う 11 種の説明変数

変数	データの処理
聴解	元の数値を使用
語彙	
文法	
読解	
SPOT(日本語の運用力)	
年齢	
日常的に日本語が話されているか(日常使用)	はい・いいえの回答をダミー変数(1・0)に変更
日本に行ったことがありますか(来日経験)	
母語以外に日常的に使える言語はありますか(第二言語能力)	
どのように日本語を学んでいますか(学習方法)	回答によって、「独学」「教育機関」「独学＋教育機関」3 種類に分類し、ダミー変数に変更
日本語を学習し始めたきっかけは何ですか(動機)	回答によって、「自分の意思ではない」「仕事・生活のため」「趣味」3 種類に分類し、ダミー変数に変更

3.3 手法

RQ1 については、I-JAS の学習者背景情報(フェイスシート)を参照し、11 種の属性を説明変数とし、各学習者のオノマトペ使用量(トークン)を目的変数とし、ステップワイズ法を用いた重回帰分析を実施し重回帰式を調べる。モデルの有意性を判断し、オノマトペ使用量(トークン)に関連する要因を考察する。その後、学習者数が最も多い中国語・韓国語・英語母語の学習者に絞って、それぞれの重回帰式を計算し、要因の変化および回帰式の説明力を比較する。

RQ2 については、RQ1 と同じ手法を使い、11 種の属性を説明変数とし、各学習者のオノマトペ使用量(トークン)を目的変数とし、重回帰分析ステップワイズ法で重回帰式を調べる。モデルの有意性を判断し、オノマトペ使用量(タイプ)に関連する要因を考察する。その後、学習者数が最も多い中国語・韓国語・英語母語の学習者に絞って、それぞれの回帰式を計算し、得られた各回帰式の説明力や選択された説明変数を比較する。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 トークンに影響する要因

ステップワイズ法を用いた重回帰分析により、11 種の学習者属性とトークンの関係を調査したところ、以下の式が得られた。

$$\text{トークン} = 0.014 * \text{聴解} + 0.012 * \text{読解} - 0.689$$

モデルの有意性を確認したところ、モデルは有意で ($F(2) = 45.570, p < .001$)、モデルの説明力は 9.5% (自由度調整済み) である。わずか 1 割未満であるものの、オノマトペ使用量という複雑な数値を聴解と読解の 2 種の説明変数のみである程度予測できるというのは重要だと言えよう。また、J-CAT 試験の項目の中、トークンは語彙力・文法力との関連性が低いということが分かった。

次に、中国語・韓国語・英語母語の学習者に絞って調査したところ、以下の式を得た。

$$\text{中国語を母語とする学習者のトークン} = 0.019 * \text{聴解} - 0.216$$

$$\text{韓国語を母語とする学習者のトークン} = 0.036 * \text{聴解} + 0.107 * \text{年齢} - 3.496$$

$$\text{英語を母語とする学習者のトークン} = 0.033 * \text{読解} + 0.409 * \text{第二言語能力} - 1.055$$

モデルの有意性を確認したところ、3 つのモデルとも有意で ($F(1) = 6.249, p = .013, F(2) = 9.520, p < .001, F(2) = 18.139, p < .001$)、モデルの説明力はそれぞれ 2.6%、14.7%、25.7% (自由度調整済み) である。母語別の回帰式と全体の回帰式を比較してみると、聴解・読解力との関連は共通であることが分かった。異なる点について、(1) 韓国語母語の学習者と英語母語の学習者はそれぞれ年齢要因と第二言語能力要因(母語以外に日常的に使える言語を持つこと)に影響されること、(2) 全体の回帰式に比べて、中国語母語の学習者の回帰式の説明力がさらに減少し、韓国語母語と英語母語の学習者の説明力が上昇したことが分かった。全体的に聴解・読解力がオノマトペ使用量(トークン)に影響するという結果が得られた同時に、母語によってトークン影響する要因が異なることから、日本語教育においては言語能力だけでなく、学習者の背景に注目する重要性が示される。また、モデルの説明力について、中国語を母語とする学習者の式は説明力が非常に低いことから、中国語を母語とする学習者の背景はばらつきが大きく、聴解能力以外にも

オノマトペの使用量に影響を与える未測定の変数が存在する可能性が高いと考えられる。一方、韓国語と英語母語の学習者の回帰式は全体の式に比べて説明力が上昇し、特に英語を母語とする学習者の場合は4分の1まで到達していることから、言語能力がこの2種の学習者に及ぼす影響が平均レベルより高いと推測される。標準化係数を調査したところ、韓国語の場合は聴解(0.356) > 年齢(0.187)、英語の場合は読解(0.428) > 第二言語能力(0.204)という結果が得られた。言語能力と異なる要因が出たものの、その影響力は言語能力の半分程度にとどまっていることが分かった。以上、トークンに影響する学習者属性を調べたところ、母語別に異なる要因が出たものの、全体としてオノマトペの使用量は学習者の聴解・読解力と関連性が高いことが分かった。

オノマトペは日本語の語彙の一種であり、語彙力と直接的に関連するであろうと思われる。また、文法力も日本語能力の基礎であるが、どうしてオノマトペ使用量はこの2つの能力との関係性が観察できなかったのであろうか。可能性として、オノマトペは日本語教育の学習項目に入っていないため、語彙力と文法力という日本語の基礎力では学習者のオノマトペ知識を区別できないことが考えられる。一方、日本語読解能力の高い学習者は日常でオノマトペと遭遇する際に、言語直感でそれを理解しようとしており、有効な $i+1$ インプットとして取り入れている。そしてインプット仮説によれば、そのようなインプットが重なると、いつかアウトプットにつながるため、オノマトペ使用はこうして聴解と読解に関連した。また、標準化係数を調査したところ、聴解(0.199) > 読解(0.142)という結果が得られた。つまり、文章で見ると、日常で耳にしたインプットのほうがオノマトペの使用に対してやや強い影響を与えていると考えられる。

以上、RQ1 については、日本語学習者を対象に、発話におけるオノマトペの使用量(トークン)と、聴解力、読解力を含む11項目の変数との関連性を探るための重回帰分析を行った。ステップワイズ法による分析結果から、聴解力と読解力という2つの変数のみ投入され、多くの変数が最終的なモデルに含まれないことが明らかになった。これは、トークンと強く関連している変数が、学習者の聴解力と読解力であることを示唆している。これにより、オノマトペ使用量がインプットの影響を受ける可能性が示され、特に音声からのインプットがオノマトペ習得において重要となることが示唆された。

4.2 RQ2 タイプに影響する要因

上記で、オノマトペの使用量(トークン)が学習者の聴解力と読解力に影響されることが示唆されたわけであるが、タイプについても同様に、これらの変数の影響が見られるのだろうか。この点を検証するために、重回帰分析ステップワイズ法で11種の学習者属性とタイプの間関係を調査したところ、以下の式が得られた。

$$\text{タイプ} = 0.006 * \text{聴解} + 0.006 * \text{読解} + 0.008 * \text{SPOT} + 0.015 * \text{年齢} - 1.049$$

モデルの有意性を確認したところ、モデルは有意で($F(4) = 33.673, p < .001$)、モデルの説明力は13.3%(自由度調整済み)である。トークンの回帰式と比較してみると、(1)説明力がわずかで

あるが(9.5%→13.3%)上昇したこと、(2)聴解と読解に加え、日本語の運用力を測定する SPOT と年齢要因がタイプに影響を与えることがわかった。トークン・タイプともに説明力が1割程度であることから、日本語学習者全体を対象とした場合、オノマトペの使用量を説明するための変数が多様であるため、単一のモデルでは捉えきれない複雑さがあることが示唆された。また、タイプは日本語の運用力と学習者の年齢と関係していることがわかった。

次に、中国語・韓国語・英語母語の学習者に絞って調査したところ、以下の式を得た。

$$\text{中国語を母語とする学習者のタイプ} = 0.014 * \text{聴解} - 0.265$$

$$\text{韓国語を母語とする学習者のタイプ} = 0.024 * \text{読解} - 0.668$$

$$\text{英語を母語とする学習者のタイプ} = 0.013 * \text{聴解} + 0.008 * \text{読解} - 0.610$$

モデルの有意性を確認したところ、3つのモデルとも有意で($F(1) = 13.469, p < .001, F(1) = 18.249, p < .001, F(2) = 15.443, p < .001$)、モデルの説明力はそれぞれ5.9%、14.8%、22.6% (自由度調整済み)である。母語別の重回帰式と学習者全体の重回帰式を比較してみると、聴解・読解力との関連は共通であることが分かった。異なる点について、(1)全体の式とは異なり、運用力と年齢要因が除去され、インプットに関する聴解と読解力のみ残されたことと、(2)トークンと同じように、全体の回帰式に比べて、中国語母語の学習者の回帰式の説明力の減少と、韓国語母語と英語母語の学習者の説明力の上昇が観察された。トークンに影響する要因と同様に、母語別学習者のタイプは聴解・読解力といった言語能力に関連するという結果が得られた。また、全体の式に比べると運用力と年齢要因が消えたことから、中国語・韓国語・英語以外の母語の学習者はより大きく運用力と年齢要因に影響されるということが示唆される。また、モデルの説明力について、トークンと同じ傾向が示され、中国語 < 韓国語 < 英語の関係が観察された。母語の差はトークンとタイプを超えて、学習者の使用量を影響していることが考えられる。標準化係数を調査したところ、英語の回帰式では聴解(0.295) > 読解(0.257)という結果が得られた。差が小さいものの、やはりタイプについても、聴解の方がやや強い影響を持っていることがわかった。

使用量を説明するトークンとタイプは表裏一体であるが、なぜタイプだけが運用力と年齢から影響を受けるのであろうか。推測として、運用力の高い学習者ほど多様なオノマトペを使いこなせるためだと考えられる。一方、トークンは運用力に関係なく、インプットの量が高ければ、自然にオノマトペを多く使用できるようになる。また、年齢が高い学習者ほど、オノマトペに限らず語彙の知識が豊富であることが考えられる。標準化係数を調査したところ、聴解(0.148) > SPOT(0.139) > 読解(0.118) > 年齢(0.066)という結果が得られた。聴解によるインプットと日本語の運用力のほうがタイプに対してやや強い影響を与えていると考えられる。

先行研究は、オノマトペの使用量に関して、初級学習者は上級学習者より少ないことを示唆していたが、本調査により、同じレベルの学習者でも、聴解・読解力がオノマトペ使用量に大きな影響

を及ぼしていることが発見されたと言える。以下は I-JAS から筆者が採取した用例である。

(1) CCH16 (J-CAT 聴解点数:74 読解点数:64 4項目合計点数:293)

調査者 小学校中学校高校大学と今〈はい〉来てると思うんですが、えっとずっと印象に残っている、忘れられない先生っていらっしゃいますか？

協力者 えーと、けっこういますね

(一部省略)

調査者 ふーん、あのどうして、そ、やさしくてまあお父さんやお母さんみたいな先生っていっぱいいると思うんですけど、どうしてその先生は特別だったんですか？

協力者 えーと、あの先生が嫌だつてあの一なんか話も、話もかけたくないんです

調査者 あそう

協力者 でも、だんだんなんかあの

調査者 うん

協力者 教えられたらえっとこの先生はいいかなと思って、あの、あの先生はあの、強引的にあの、自分のなんかしている、していることをあの、学生に教えたらいいいかな、いいなおも、思うだけではなくあの、学生のとくり、独立の志向がああ

調査者 うんうんうん

協力者 もとめら、求めている、なんか、な、何事も学生自身の考えからあの

(2) KKR10 (J-CAT 聴解点数:81 読解点数:91 4項目合計点数:301)

協力者 韓国の中でも、外国の中でも、がいこ、外国の〈はい〉、外国に知らされているその(連体詞)ビビンパとゆうのはだいたいあそこの形ですね

調査者 うんうん、そうなんですか、〈はい〉えっと一ビビンパ発祥の地なんですか、そこで生まれた一

(一部省略)

協力者 ま、食べる、食べる、さすがに食べる時まで、箸を使うのはちょっと

調査者 ですよー？、それはちょっと意味がなんか、ないとゆうか

協力者 え、ないんで、ない、から

調査者 はーそうなんですか

協力者 まあそもそもできませんので、あは、箸でやったら、全部、ばらばらになってしまうので

調査者 はー、そうですね

(一部省略)

調査者 ふーん、じゃあ、あのKRさんが一、まあ、子供の時でも一いいんですけど一、お誕生日で一何(なに)か思い出に残っているお誕生日って、ありますー？

協力者 思い出ってゆう、かー

調査者 うん、どんなお誕生日だった、とか

(一部省略)

協力者 上の位、上の部隊から来るんですね、だから、それーでやったことは、あるんですけど、ま、軍や、はい、軍の中にいる時はあんまり、そ、そうゆう、そうゆう甘い物とか、そういうこと、あんまり食べら、食べられなかったの

調査者 あー確かに

協力者 あれが出た時に、ま、わた、私だけじゃなくて、全員、全員の目が、〈{笑}〉もうきらきらって感じなので{笑}

調査者 {笑}そうですか

(一部省略)

調査者 うんうん、確かにそうですねー、へー、そっかー、で、今じゃあ公務員になるために、何か準備とかを、されてるんですか？

協力者 その試験とか、試験の問題とか、ちよくちよくやってるんですけど〈うんうん、あつ〉、今はまだ本格的にはやってないんですね

調査者 うーん、問題集とかいっぱい本屋さんに出ていますか？

協力者 出ていますから、まあ、それーよって、かいで、はい

調査者 ふーん、じゃあ、えっでも、大学の三年生だとそろそろ

協力者 そろそろですね

調査者 ですよ？

協力者 はい、そろそろ、や、やらー、時期ですね

上記の例を見てみると、2人の学習者のJ-CAT合計点数はともに300点程度で、上級学習者と言えるわけであるが、聴解・読解の点数において、(2)の学習者の方が高いことがわかった。そこで、対話でのオノマトペ使用に注目すると、(1)の学習者は「だんだん」というオノマトペを使用し、先生の印象変化の過程を描写した。一方、(2)の学習者は聴解・読解力が高く、対話の中で「ばらばら」、「きらきら」、「そろそろ」という3種のオノマトペを合計4回使用し、ビビンバの米粒の状態、仲間が期待している様子と時間が迫ってくる感じを生き生きと描写し、オノマトペの運用力が高いと言えよう。このことは、聴解と読解力は、オノマトペの産出の量と質ともに影響していることを示唆するだろう。

以上、RQ2については、日本語学習者を対象に、発話におけるオノマトペの使用量(タイプ)と、聴解力、読解力を含む11項目の変数との関連性を探るための重回帰分析を行った。ステップワイズ法による分析結果から、聴解力・読解力・SPOT・年齢という4つの説明変数の影響が示された。各変数の標準化係数を調査したところ、聴解>SPOT>読解>年齢という結果が得られた。学習者全体に関する重回帰式を見ると、オノマトペの使用量と強く関連しているのは学習者の聴解力と日本語運用力であることが示されたが、母語別の式に注目すると、聴解と読解力が残され、運用力と年齢要因が含まれない場合もある。これにより、オノマトペの使用量(タイプ)は使用量(トークン)と同じ傾向にあり、学習者の聴解と読解力に影響される可能性が示され、同時に母語によって運

用力と年齢にも影響されることが示唆された。以上を踏まえ、これからオノマトペ教育の方向性は音声教材などにあることが示唆された。

5. まとめ

本研究は『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)を分析し、対話タスクにおける学習者の属性と ABAB 型オノマトペ使用量の関係性を調査し、その原因を考察した。これにより、オノマトペの使用は学習者の基礎力ではなく、理解力に関係があることが示唆された。以下では各 RQ で得られた知見をまとめる。

RQ1(トークンに影響する要因)では、対話におけるオノマトペのトークンと 11 種の学習者属性の関係を調査した。その結果、聴解と読解力という 2 つの説明変数を含む回帰式が得られ、日常的なインプットがトークンに影響を与えることが示唆された。また、母語別の回帰式で、聴解と読解力とは異なる説明変数が取り出されたこと、母語も学習者のオノマトペの使用に影響を及ぼすことが考えられる。日本語教育においては言語能力だけでなく、学習者の背景に注目する重要性が示された。

RQ2(タイプに影響する要因)では、対話におけるオノマトペのタイプと 11 種の学習者属性の関係を調査した。その結果、聴解・読解・運用力・年齢という 4 つの説明変数を含む回帰式が得られ、トークンのような理解力の他、運用力と年齢も学習者のタイプに影響を与えることがわかった。母語別に回帰式を求めた結果、もっともデータ量の多い中国語・韓国語・英語母語の学習者の回帰式から運用力と年齢要因が除外されたものの、全体的に見れば、より多様なオノマトペを使いこなすためには、実際の運用力と時間をかけて語彙などの知識・経験を積むことが必要であるといえるだろう。

以上で見たように、本研究は一定の成果を挙げたが、もちろん、課題も多い。もっとも重要な問題は、変数の数は少なく、十分な説明力を持つ回帰式が得られなかったことである。今後、さらに多くの学習者の背景情報を収集し、分析していきたい。

引用文献

- 小野正弘(2007) (編) 『擬音語・擬態語 4500: 日本語オノマトペ辞典』 小学館。
- グエン, ティ タイン トゥイ(2018) 「中国人日本語学習者による日本語オノマトペの使用実態と産出傾向: ベトナム人日本語学習者との比較」 『一橋日本語教育研究』 6, 41–50.
- 左雲萌夏(2023) 「初級学習者のオノマトペ使用の特徴から見る オノマトペ指導の必要性と方向性の示唆 —『心』に関する表現に着目して—」 『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 15, 10–18
- 前田未央(2009) 「日本語学習者による擬音語・擬態語の意味推測に影響する要因」 『ニダバ』 38, 128–137.
- 廉沢奇(2022) 「話し言葉 10 種の言語データのコーパス調査をふまえた日本語学習者のための ABAB 型基本口語オノマトペの選定」 『統計数理研究所共同研究リポート』 456, 117–129.